

# Total Rehabilitation Research

Printed 2017.0630 ISSN2189-4957

Published by Asian Society of Human Services

*June* 2017  
VOL. 5



Sakurako Yonemizu

[By the window]

## ORIGINAL ARTICLE

## SNEAT10を用いた IN-Child の特徴分析

## — 沖縄県内の小学校における調査を中心に —

小原 愛子<sup>1)</sup> 照屋 晴奈<sup>2)</sup> 太田 麻美子<sup>1)3)</sup> 安藤 霧子<sup>1)</sup>

- 1) 琉球大学教育学部  
 2) 有限会社オーシャン・トゥエンティワン  
 3) 琉球大学大学院教育学研究科

## &lt;Key-words&gt;

Special Needs Education Assessment Tool 10 (SNEAT10), Inclusive Needs Child (IN-Child), IN-Child の特徴分析, 小学生

colora420@gmail.com (小原 愛子)

Total Rehabilitation Research, 2017, 5:38-46. © 2017 Asian Society of Human Services

## I. 問題と目的

IN-Child とは、Inclusive Needs Child (包括的教育を必要とする子) の略称であり、「発達の遅れ、知的な遅れ又はそれらによらない身体面、情緒面のニーズ、家庭環境などを要因として、専門家を含めたチームによる包括的教育を必要とする子」と定義されている (韓・太田・權, 2016)。この用語が作られた背景には、通常の学級において、医師による診断はないが発達障害と同様の問題行動が見られる児童生徒に関して「気になる子」と呼ばれる子どもの増加が挙げられる。「気になる子」の概念は明確な定義もなく、保育者と教員の視点の違いによる情報交換のズレ (石倉・仲村, 2011) や教師個人の主観が気になる子の判断に大きく影響し、さらに教育的対応が難しくなっているという課題があったため、IN-Child という用語が作られ定義した上で、科学的に IN-Child の教育的診断を行うツールである IN-Child Record が開発された (韓・太田・權, 2016)。IN-Child Record は、大きく、「原因」と「結果」に分類されており合計 82 項目で構成された尺度である。

太田・沼館・韓 (2016) は、IN-Child Record を用いて、「合理的配慮」実践事例データベース (国立特別支援総合研究所) の教育実践事例を対応分析することで、IN-Child の特徴とそれに応じた教育的支援を典型化するための研究を行った。その結果、身体面に困難のある子ども、情緒面に困難のある子ども、生活面に困難のある子ども、学習面に困難のある子どもに対する支援の典型化を行い、その傾向を捉えた。しかし、この研究は実際に IN-Child のデータを収集・使用して特徴分析をした研究ではなかった。現在、IN-Child に対するデータ収集を行い、そのデータに基づいて特徴分析を行っている研究は見当たらない。

小原・太田・安藤 (2016) は、IN-Child を抽出するための SNEAT10 を開発し、信頼性及び妥当性の検証 (Kohara, Ando, Yano et al., 2017) を行っている。SNEAT10 は、既存の

Received

May 3, 2017

Revised

May 14, 2017

Accepted

May 27, 2017

Published

June 30, 2017

SNEAT (Special Needs Education Assessment Tool; 特別支援教育成果評価尺度) を通常の学校で使用できるようにしたものであり、10項目で構成されているため IN-Child Record に比べ、簡易に IN-Child を抽出できるツールである。SNEAT10 は、特別支援学校の授業成果評価を行うツールを基にして開発されたため、通常学校に在籍するほとんどの児童生徒は高い点数をとること、特別支援教育を必要とする IN-Child は低い点数をとることを予測して開発されている。そのためスクリーニングツールとしての機能も持つが、同時に教育成果を評価するための機能を併せもつため、IN-Child の子どもの特徴を分析し、教育的課題を考察するためにも使用できると考えた。また、SNEAT は QOL の概念を取り入れた尺度となっているため、SNEAT10 も QOL の観点から教育的課題を考察することができるといえる。

本研究では、SNEAT10 を使用して IN-Child 該当児の特徴を分析し、IN-Child の実態把握と教育における課題を抽出することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 対象と手続き

2016年2～3月に沖縄県内の1校の小学校1～5年生の全生徒(526名)を対象にSNEAT10のデータを収集した。SNEAT10の評価は、学級担任に行ったものである。本研究では、526名のデータのうち、包括的教育が必要であるとする基準値を下回った IN-Child 該当児のデータを対象に分析する。基準値は、先行研究同様に(平均点数) - (2×標準偏差)の計算式を使用した(小原・太田・安藤, 2016)。

学校長宛に依頼状である公文書と研究の概要の説明文を渡した上で、研究方法や結果のフィードバック方法について口頭で説明し、学校長及び副校長、教頭の同意を取ったうえで、調査を実施した。データの回収は、全データが揃った時点で小学校へ研究者本人が受け取りにいった。

### 2. SNEAT10 の内容

SNEAT10 は、SNEAT (Special Needs Education Assessment Tool; 特別支援教育成果評価尺度) を通常の学校で使用できるように開発されたもので、体の健康、心の健康、社会生活機能の3領域10項目から構成されている(表1)。これら10項目は、児童生徒の教育達成度に合わせ授業担当教員が評価するものである。それぞれの項目について、評価者は、1=「ほとんどない」、2=「少しだけ」、3=「多少は」、4=「かなり」、5=「非常に」で最も適切な数字に○を付けるようにした(小原・太田・安藤, 2016)。SNEAT10 は IN-Child 該当児を抽出するためのスクリーニングツールとして信頼性及び判別的妥当性が確認されている(小原・太田・安藤, 2016; Kohara, Ando, Yano et al., 2017)。

表1 SNEAT10の領域と項目

体の健康	
Q1	授業で行った活動は、児童生徒の体の状態に適したものでしたか
Q2	児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか
Q3	児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか
心の健康	
Q4	児童生徒に肯定的な気分の変化はみられましたか
Q5	児童生徒は集中して学習活動に取り組みましたか
Q6	児童生徒の学習上の意欲は高まりましたか
Q7	児童生徒は、授業中起こりうる場所や場面の変化を理解し対応しましたか
社会生活機能	
Q8	児童生徒は、授業中、他者とのかかわりを持ちましたか
Q9	児童生徒は、授業中、適切なコミュニケーション手段を選択し表現しましたか
Q10	児童生徒は、授業のルールを理解し行動調整をしながら参加しましたか

### 3. 統計分析の方法

IN-Child 該当児の男女の内訳の差の検定は、カイ二乗検定使用し、性別や学年別による身体的、心理的、社会的特徴の比較分析は、t検定を使用した。SNEAT10の領域間の比較を行う検定には、一元配置分散分析を使用した。統計ソフトはSPSS Ver.24を使用した。

## III. 結果

### 1. 回収状況と対象者の基本属性

526名を対象にし、欠損値を除く594データが分析対象となった。対象者の基本属性は、1年生104名(19.8%)、2年生105名(20.0%)、3年生105名(20.0%)、4年生102名(19.5%)、5年生108名(20.6%)であった。男女の内訳は、男子262名(50.0%)、女子262名(50.0%)であった。

総合点数や各領域のIN-Child 該当人数及び男女の内訳については表2の通りである。524名のデータ中、合計点数がIN-Childに該当した児童は33名(6.3%)であり、1領域でも該当する児童は58名(11.1%)であった。また、総合点数及び全領域が該当する児童は20名(3.8%)であった。内訳をみると、IN-Childの学年別の割合をみると、1年生6名(10.5%)、2年生27名(47.4%)、3年生0名(0.0%)、4年生12名(21.1%)、5年生13名(21.8%)であった。

性別によるIN-Child 該当児の関連性をみるためにカイ二乗検定を行ったところ男児の方がIN-Childに該当し、有意であった( $\chi^2 = 17.449$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.001$ )。

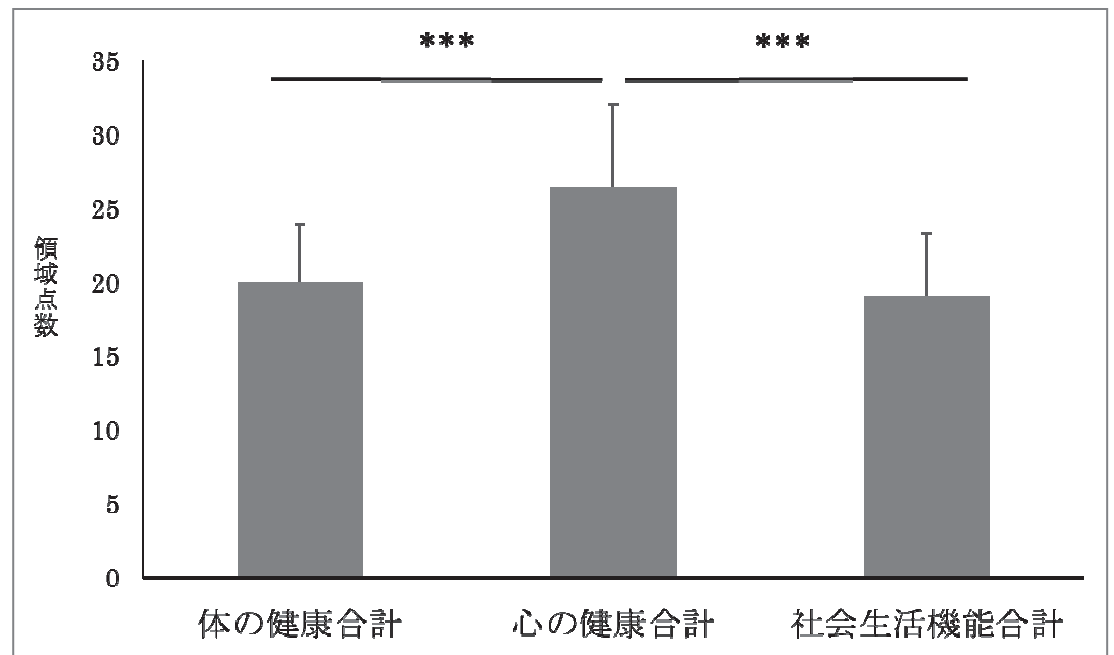
表2 IN-Child 該当人数と男女の内訳

	人数 (%)	男子 (%)	女子 (%)
総合点数	33(6.3)	28(84.8)	5(15.2)
体の健康	15(2.9)	9(60.0)	6(40.0)
心の健康	31(5.9)	24(77.4)	7(22.6)
社会生活機能	39(7.4)	31(79.5)	8(20.5)
1領域いずれかに該当する	58(11.1)	43(74.1)	15(25.9)
総合点数及び全領域で該当する	20(3.8)	18(90.0)	2(10.0)

## 2. IN-Child 該当児の身体的・心理的・社会的特徴分析

### 1) 領域点数の比較分析

IN-Child 該当児のみの身体的・心理的・社会的特徴を分析した結果、心の健康が最も点数が高く、 $20.00 \pm 3.88$  点となり、体の健康  $26.45 \pm 5.61$  点、社会生活機能  $19.03 \pm 4.29$  点となった（図 1）。心の健康と体の健康、心の健康と社会生活機能の間に有意差がみられた（ $F(2,171) = 43.57, p < 0.001$ ）。

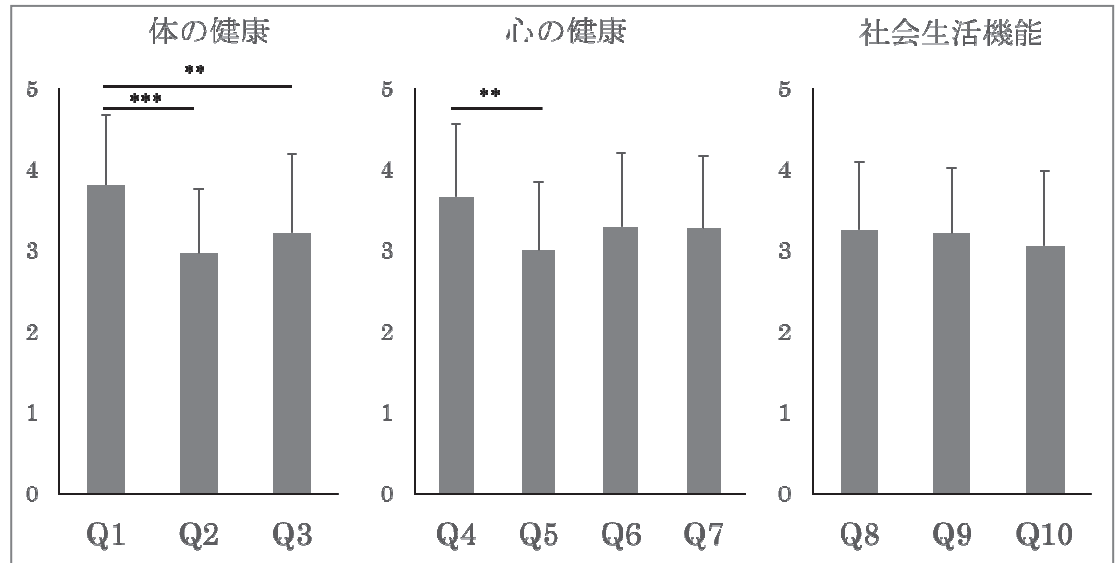


n=58, \*\*\*p<0.001

図 1 IN-Child の領域点数

### 2) 各領域における項目の点数の比較分析

領域内の項目点数を分析した結果、Q1 が  $3.81 \pm 0.87$ 、Q2 が  $2.97 \pm 0.79$ 、Q3 が  $3.22 \pm 0.97$ 、Q4 が  $3.66 \pm 0.91$ 、Q5 が  $3.00 \pm 0.86$ 、Q6 が  $3.29 \pm 0.92$ 、Q7 が  $3.26 \pm 0.89$ 、Q8 が  $3.26 \pm 0.83$ 、Q9 が  $3.21 \pm 0.81$ 、Q10 が  $3.05 \pm 0.93$  だった（図 2）。一要因の分散分析を行った結果、体の健康の領域では、Q1「授業で行った活動は、児童生徒の体の状態に適したものでしたか」より Q2「児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか」と Q3「児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか」の点数が低く、有意差がみられた（ $F(2,171) = 13.98, p < 0.001$ ）。心の健康の領域では、Q4「児童生徒に肯定的な気分の変化はみられましたか」より Q5「児童生徒は集中して学習学童に取り組みましたか」の点数が低く有意差が見られた（ $F(3,228) = 5.23, p < 0.001$ ）。社会生活機能では、有意差は見られなかった。

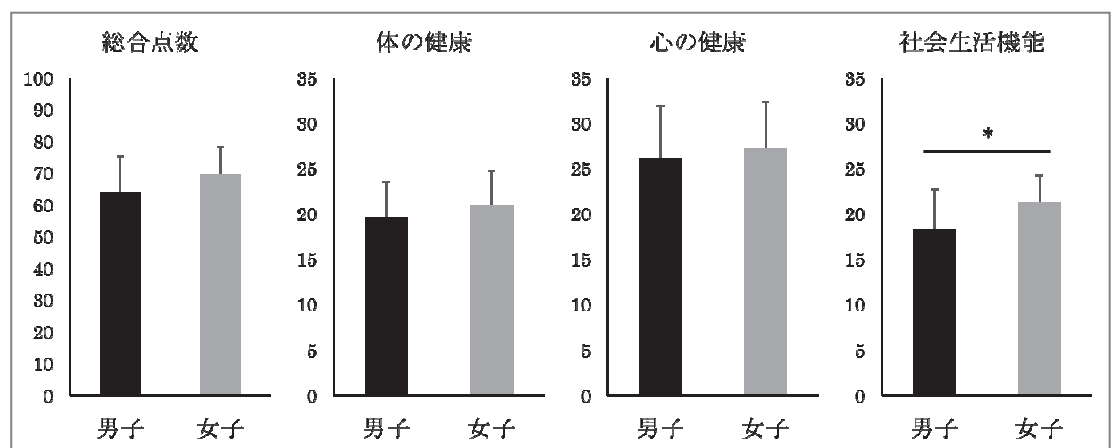


n=58, \*\*p<0.01, \*\*\*p<0.001

図2 領域内における各項目点数の比較

### 3. 性別による IN-Child 身体的・心理的・社会的特徴の比較分析

IN-Child 該当児のみの性差による身体的・心理的・社会的特徴を分析した (図 3)。総合点数は、男子 64.18±11.20 点、女子 69.57±8.81 点だった。体の健康は、男子 19.68±3.90 点、女子 21.00±3.74 点だった。心の健康は男子 26.18±5.78 点、女子 27.29±5.12 点だった。社会生活機能は男子 18.32±4.42 点、女子 21.29±3.00 点だった。総合点数も各領域も男子に比べ女子の方が点数が高く、t 検定を行った結果、社会生活機能の領域において男女間に有意差が見られた ( $t = -2.34, df = 56, p < 0.05$ )。

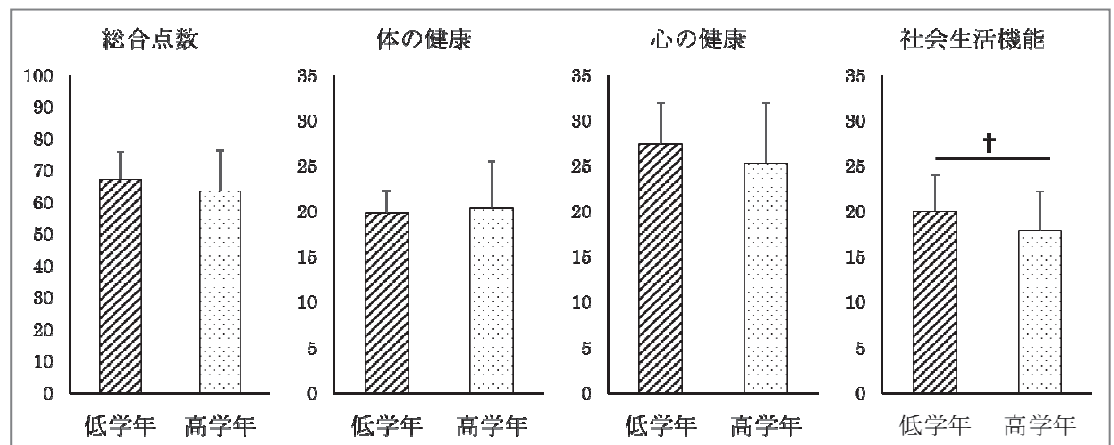


男子 n=44、女子 n=14、\*p<0.05

図3 性別による総合点数及び領域点数

#### 4. 学年別による身体的・心理的・社会的特徴の比較分析

IN-Child 該当児は3年生に該当児がいなかったため、1～2年生を低学年、4～5年生を高学年と学年別に分類し分析を行った(図4)。総合点数は、低学年  $67.09 \pm 8.79$  点、高学年  $63.36 \pm 12.97$  点だった。体の健康は、低学年  $19.82 \pm 2.47$  点、高学年  $20.24 \pm 5.24$  点だった。心の健康は低学年  $27.33 \pm 4.57$  点、高学年  $25.28 \pm 6.66$  点だった。社会生活機能は低学年  $19.94 \pm 4.08$  点、高学年  $17.84 \pm 4.36$  点だった。総合点数及び心の健康、社会生活機能の領域は、高学年の方が点数が低く、体の健康は高学年の方が高い結果となった。また、t 検定を行った結果、社会生活機能の領域で有意傾向が見られた ( $t = 1.89, df = 56, p < 0.1$ )。



低学年  $n=33$ 、高学年  $n=25$ 、 $0.05 < \dagger < 0.1$

図4 学年別による領域点数及び総合点数

#### IV. 考察

本研究では、SNEAT10 を使用して IN-Child 該当児の特徴を分析し、IN-Child の実態把握と教育における課題を抽出することを目的とした。

SNEAT10 の総合点数で IN-Child に該当した子どもは、33名 (6.3%) だった。これは、「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」(文部科学省, 2012) の推定値 6.5% とほぼ同程度の結果となった。

IN-Child 該当児の身体的・心理的・社会的特徴をみると、「心の健康」が最も高く、その他の領域である「体の健康」、「社会生活機能」が有意に低いことが明らかとなった。このことより、IN-Child に対して「心の健康」に関する教育よりも「体の健康」や「社会生活機能」に関する教育が課題であり、今後、それらの内容を重点的に行う必要性があることが示唆された。特に、体の健康をみると、領域内における項目点数でも Q2「児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか」と Q3「児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか」の項目は有意に低かったため、IN-Child の児童に対する教育内容としては、姿勢・運動・動作に関する必要があると考えられる。また、生活リズム等に関連する生活管理の理解を促すための教育を行うことも必要であろう。また、「心の健康」領域は、領域比較を行ったところ、他の領域と比べて高かったが、その中でも Q5「児童生徒は集中して学習学童に取り組みましたか」は有意に低く、Q1～Q10 の中でも最も低い点数であった。このことから、IN-Child

の特徴として、学習への集中が難しい子どもが多いことが示唆され、特に集中力を持続させるような教育的アプローチが効果的であると考えられる。

性別をみると、男子は女子に比べ IN-Child に多く該当することが明らかになった。発達障害は男児の方が多くことが言われており、発達障害の診断基準となる DSM-5 の中では、ASD や ADHD においても男児の有病率が高いという結果を示している(尾崎・三村・村井, 2014)。それらを鑑みると、本研究においても IN-Child に該当した子どもは、男子の方が有意に多かったため、この結果は妥当な結果であるといえよう。性別による身体的・心理的・社会的特徴を分析した結果、男子は女子より点数が低く、特に社会生活機能において性別による有意差がみられた。これらのことから、他者との関わりや、適切なコミュニケーション手段の選択、そして授業のルールを理解し行動調整しながら授業参加するといった教育目標で教育プログラムを行うことが必要であろう。

学年別による身体的・心理的・社会的特徴の分析を行った結果、総合点数及び、「心の健康」、「社会生活機能」の領域では、高学年の方が点数は低く、特に「社会生活機能」の領域では有意傾向が見られた。「体の健康」に関しては、高学年の方が点数は高いが差は見られなかった。坪井・野村・鈴木ら(2011)が行った小中学生に行った「気になる子ども」の QOL に関する調査の中でも、学年があがるにつれ QOL は下がってきていることが明らかとなっている。先行研究で使用された QOL 尺度は、Kid-KINDL が使用されており、「身体的健康」、「情緒的 wellbeing」、「自尊感情」、「家族」、「友だち」、「学校」の領域で構成されている。これらは、SNEAT10 の「体の健康」、「心の健康」、「社会生活機能」の領域と類似している。笹森・後上・久保山ら(2010)は、早期から発達段階に応じた一貫した支援を行っていくことが重要であり、早期発見・早期支援の対応の必要性は極めて高いと述べている。本研究は横断的研究であったが、IN-Child 高学年の方が点数は低かったため、IN-Child は学年があがるにつれ、より学校生活や学習上で困難を抱えることが予想される。このことから小学校低学年という早期段階で教育的アプローチを行うことが必要だと考えられる。

本研究では、IN-Child を抽出するための SNEAT10 を用いて IN-Child の実態調査を行ったが、今後は、IN-Child Record を用いてより詳細な実態把握を行い、教育的課題を明らかにし、教育的アプローチ方法について具体的に明らかにすることが必要であろう。

## 付記

データ収集にご協力いただいた沖縄県内の小学校の校長先生、副校長先生、教頭先生、学級担任の先生方に心からお礼申し上げます。



## 文献

- 1) Aiko KOHARA, Kiriko ANDO, Natsuki YANO & Sakurako YONEMIZU (2017) The Verification of Validity of the SNEAT10 in Elementary School: The Study of Screening Scale for Inclusive Needs Child (IN-Child). 2<sup>nd</sup> Asian Research Conference of Huma Services Innovation, 11.
- 2) Aiko KOHARA, Mamiko OTA & Kiriko ANDO (2016) The Verification of the Reliability of the SNEAT10; The Study of Screening Scale for Inclusive Needs Child. *Journal of Inclusive Education*, 1, 67-73.
- 3) American Psychiatric Association 編 日本精神神経学会 日本語版用語 監修. 高橋三郎・大野裕 監訳 染矢俊幸・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉 訳 (2014) DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院.
- 4) 韓昌完・太田麻美子・權偕珍 (2016) 通常学級に在籍する IN-Child(Inclusive Needs Child:包括的教育を必要とする子)Record の開発. *Total Rehabilitation Research*, 3, 84-99.
- 5) 石倉健二・仲村慎二郎 (2011) 「気になる子ども」についての保育者と小学校教員による 気づきの相違と引き継ぎに関する研究. *兵庫教育大学研究紀要*, 39, 67-76.
- 6) 小原愛子・太田麻美子・安藤霧子 (2016) Special Needs Education Assessment Tool 10(SNEAT10)の信頼性の検証—スクリーニングツールとしての機能検証—. *Journal of Inclusive Education*, 1, 67-73.
- 7) 松本禎明・須川果歩 (2014) 発達障害の子どもの支援に関する小学校教諭の意識に関する調査研究. *九州女子大学紀要*, 50(2), 169-185.
- 8) 文部科学省 (2012) 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について.
- 9) 太田麻美子・沼館知里・韓昌完 (2016) IN-Child Record を活用した IN-Child の個別教育支援モデル構築のための基礎的研究. *Journal of Inclusive Education*, 1, 35-47.
- 10) 笹森洋樹・後上鐵夫・久保山茂樹・小林倫代・廣瀬由美子・澤田真弓・藤井茂樹 (2010) 発達障害のある子どもへの早期発見・早期支援の現状と課題. *国立特別支援教育総合研究所研究紀要*, 37, 3-15.
- 11) 坪井裕子・野村あすか・鈴木伸子・畠垣智恵・蒔田玲子・丸山圭子綱・松本真理子・森田美弥子 (2011) 小・中学校における「気になる子ども」の QOL. *日本心理学会第 53 回総会発表論文集*, 582.

ORIGINAL ARTICLE

# The Characteristics of “IN-Child” Using SNEAT10 (Special Needs Education Assessment Tool 10): Focusing on the Survey at an Elementary Schools in Okinawa

Aiko KOHARA<sup>1)</sup> Haruna TERUYA<sup>2)</sup> Mamiko OTA<sup>1)3)</sup> Kiriko ANDO<sup>1)</sup>

1) Faculty of Education, University of the Ryukyus

2) Okinawa Center for Educational Research And New Business for the 21st Century

3) Graduate School of Education, University of the Ryukyus

## ABSTRACT

IN-Child (Inclusive Needs Child) have increased in school education. However, there has been no research on the actual situation of IN-Child. The SNEAT 10 is the screening tool for IN-Child and is a tool for measuring educational outcomes. Therefore, the purpose of this study is to analyze the characteristics of IN-Child using SNEAT 10, to grasp the actual condition and to extract educational issues.

This study is a cross-sectional study. Data collection have carried out at a elementary school in Okinawa Prefecture from February to March 2016. The extracted IN-Child was 6.3%. The ratio of men to women was 84.8% to 15.2%. Boys were significantly more ( $\chi^2 = 17.449$ ,  $df = 1$ ,  $p < 0.001$ ). The domain of "Mental health" was the highest score in each domain, and there was a significant difference between "Physical function" and "Social function" ( $F(2,171) = 13.98$ ,  $p < 0.001$ ). Boys score was significantly lower in the domain of "social function" ( $t = -2.34$ ,  $df = 56$ ,  $p < 0.05$ ). And, in the domain of "Social function", the score of the upper grades was low and a marginally significant. It became clear that IN-Child has educational problem concerning "Social function" in particular.

Received

May 3, 2017

Revised

May 14, 2017

Accepted

May 27, 2017

Published

June 30, 2017

<Key-words>

Special Needs Education Assessment Tool 10 (SNEAT10), Inclusive Needs Child (IN-Child), characteristics of IN-Child, elementary school students

colora420@gmail.com (Aiko KOHARA)

Total Rehabilitation Research, 2017, 5:38-46. © 2017 Asian Society of Human Services



### - Editorial Board -

Editor-in-Chief	Masahiro KOHZUKI	Tohoku University (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)



Aiko KOHARA University of the Ryukyus (Japan)	Jin KIM Choonhae College of Health Sciences (Korea)	Toru HOSOKAWA Tohoku University (Japan)
Akira YAMANAKA Nagoya City University (Japan)	Kyoko TAGAMI Aichi Prefectural University (Japan)	Yoko GOTO Sapporo Medical University (Japan)
Atsushi TANAKA University of the Ryukyus (Japan)	Makoto NAGASAKA KKR Tohoku Kosai Hospital (Japan)	Yongdeug KIM Sung Kong Hoe University (Korea)
Daisuke ITO Tohoku Medical Megabank Organization (Japan)	Minji KIM Tohoku University (Japan)	Yoshiko OGAWA Teikyo University (Japan)
Eonji KIM Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)	Misa MIURA Tsukuba University of Technology (Japan)	Youngaa RYOO National Assembly Research Service: NARS (Korea)
Giyong YANG Pukyong National University (Korea)	Moonjung KIM Ewha Womans University (Korea)	Yuichiro HARUNA National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)
Haejin KWON Ritsumeikan University (Japan)	Nobuo MATSUI Bunkyo Gakuin University (Japan)	Yuko SAKAMOTO Fukushima Medical University (Japan)
Hideyuki OKUZUMI Tokyo Gakugei University (Japan)	Shuko SAIKI Tohoku Fukushi University (Japan)	Yuko SASAKI Sendai Shirayuri Women's College (Japan)
Hitomi KATAOKA Yamagata University (Japan)	Suguru HARADA Tohoku University (Japan)	
Hyunuk SHIN Jeonju University (Korea)	Takayuki KAWAMURA Tohoku Fukushi University (Japan)	

### Editorial Staff

- Editorial Assistants	Natsuki YANO	Tohoku University (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

## Total Rehabilitation Research

### VOL.5 June 2017

© 2017 Asian Society of Human Services

Editor-in-Chief Masahiro KOHZUKI

Presidents Masahiro KOHZUKI • Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan  
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashhs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press

Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, Japan  
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashhs201091@gmail.com

# Total Rehabilitation Research

VOL.5 June 2017

## CONTENTS

### ORIGINAL ARTICLES

---

- The Verification of the Reliability and Construct Validity of the IN-Child Record:  
Analysis of Cross-sectional Data..... **Changwan HAN**, et al. 1
- 
- Mood-Incongruent Implicit Memory Bias in Non-Clinical Depression:  
Dissociation between Conceptually Driven and Data-Driven Processing..... **Kyoko TAGAMI** 15
- 
- Current Situation and Issues of Inclusive Education in Early Childhood Education:  
Evaluation and Analysis Using the Inclusive Education Assessment Tool..... **Eonji KIM**, et al. 27
- 
- The Characteristics of “IN-Child” Using SNEAT10 (Special Needs Education Assessment Tool 10):  
Focusing on the Survey at an Elementary Schools in Okinawa..... **Aiko KOHARA**, et al. 38
- 
- Provision Environment of Korean Social Services:  
Focusing on Regional Differences..... **Yuri KIM**, et al. 47
- 

### SHORT PAPER

---

- The Status of Senior Employment Program in South Korea:  
Focus on Life Satisfaction of Senior..... **Moonjung KIM** 63
- 

### ACTIVITY REPORT

---

- A Case Study of the Effects of Eating Posture on the Dietary Intake of  
Children with Severe Motor and Intellectual Disabilities:  
A Comparison of Dietary Intakes when Held and when Using a Cushioned Chair..... **Osamu ISHIDA** 75
- 

Published by  
Asian Society of Human Services  
Okinawa, Japan